

# 原子力機構組織の危険性

美浜町 松下照幸

今年8月26日、もんじゅで、燃料交換時に使う炉内中継装置を取り外す作業をしていたときのことです。同装置を炉内に落下させるという重大な事故が発生しました。炉内中継装置は、直径55cm、長さ12m、重さが3.3トンもある大きな装置です。同時に、地元では「通報の遅れ」が問題となりました。

10月4日には、午前10時過ぎから炉内中継装置の回収作業を行っていました。作業開始後まもなく、トラブルで作業中断となりました。つり上げ器具を下ろし、炉内中継装置にあと30cmというところで、装置などの重さを監視する荷重計の警報が作動したのです。トラブルの原因は、「荷重計内の電気信号の乱れと見られる」が、発生理由については「今は分からない」と発表されました。

一方、原子力機構(独立行政法人日本原子力研究開発機構)は、午前中には福井県、敦賀市に作業中断の連絡を入れましたが、報道陣への連絡は午後3時半でした。「中断は一時的で作業は続けられると思っていた」と釈明したのですが、報道陣からは批判が相次ぎました。3.3トンもの重量があり、長さが12mもある大きな装置が「炉心に落下した」のに、一時的な作業中断で終わるわけがありません。「推進サイド」に立つ県や市には連絡を入れましたが、報道陣へは「これ以上どうしようもない」との判断の後に、仕方なく連絡を入れたのでしょう。

10月8日、つり上げ装置の警報問題で再発防止策を実施し、その有効性を検証しようとしたところ、再び同じ箇所警報が鳴りました。警報作動の基準値を新しい基準値に変更したのですが、再び警報が鳴ってしまったということです。以前に発生したナトリウム漏洩検知器の誤作動問題も、今回とよく似た経緯でした。原子力機構には研究開発組織としての適切な仕組みも力量もないことを示しています。

研究開発体制のあまりの「無様さ」に笑いたくもありませんが、研究開発をしているのは高速増殖炉「もんじゅ」です。危険きわまりないもんじゅと、危険きわま

りないこの組織に、国、県、市は、厳しいチェックを入れようとしていません。地域に根を張ることで、地域に生活する人たちにその危険性を訴えています。私の非力さに歯ぎしりするばかりです。

昨年12月に、若狭連帯行動ネットワークで、「もんじゅの耐震安全性評価結果に関する公開質問状」を原子力機構に提出しました。立地地域で活動するには厳しい制約があり、提出は私一人で行いました。しかし、マスコミから6社も駆けつけてくれました。これはありがたかったですね。しかし、私達の公開質問状に対し、原子力機構は回答を拒否しました。

実は、これに先立つ一昨年の2008年11月5日に「高速増殖炉『もんじゅ』に関する申し入れと公開質問状」を提出しましたが、回答はありませんでした。年が明けて昨年、もんじゅの報告会が美浜町で行われました。この報告会で、都合の悪いことには応えない原子力機構の姿勢を厳しく糾弾しました。彼らは多くの参加者を前に、苦虫(ニガムシ)を噛んだような顔をしました。「辛かった」のでしょうか。報告会が終わると原子力機構の元幹部が私のところへ来て、「文章で質問を出して下さい」と言いました。私達は了解し、再度、もんじゅの耐震安全性評価に関する質問状を提出しました。それが昨年12月に出した質問状です。ところが、その質問状にも答えようしないのです。質問状提出時には「公開討論会の開催については検討する」と回答しながら、2ヶ月間も返事がないため、回答を督促すると、「応じられない」というのです。

今年8月に再び、美浜町でもんじゅ報告会がもたれました。大きな会場に町内の有力者や美浜町職員、関連会社の職員が動員され、今回も200名を超える参加者がありました。そこで再び、原子力機構を糾弾しました。四面楚歌のような会場で意見を述べるのは、私には大変なプレッシャーです。しかしそれ以上に、会場に大量動員をかけて多くの人を集めて

くれる主催者には、「感謝」せざるを得ません。我々がとても集められない人数の参加者に向かって、発言できるからです。だが、頑として、若狭ネットの質問状に答えようとはしませんでした。

耐震安全性評価に関する私達の具体的な質問に、「答えることができない」のが真相でしょう。もし、もんじゅの耐震安全性評価に関する私達の指摘に、原子力機構がしっかりと答えられるのなら、原子力機構は私達のところに向いてでも説明を行うでしょう。そうすることで、もんじゅの推進力が働くからです。

原子力機構の総務課長と数度にわたって交渉しましたが、質問状に関する意見交換の場を作ろうとはしませんでした。「回答拒否と受け取っていないのか」と言いますと「検討中」を繰り返すばかりで、「そちらがそう思うのならそれで結構です」と開き直りました。昨年暮れの質問状提出から半年以上も立っています。「何が問題で、検討が長引いているのか」、「いつ頃にめどが付くのか」、「検討中の経緯を教えてください」と食い下がっても、「検討中」を繰り返すばかりです。税金を大量に使っている組織が、このような不遜な態度を取っています。多くの人たちがこの事を知ったら、もんじゅは止まることでしょう。彼らはそれを恐れているのです。

腹に据えかねましたので、福井新聞の「こだま欄」にその経緯を投稿しました。過去に数十回投稿して載らなかったことは一度もありませんでしたが、今回

は、はじかれてしまいました。その2週間後くらいだったでしょうか、福井新聞に2面全部を使った原子力機構の広告が掲載されました。地元の情報誌として福井新聞を購読していましたが、これで「ふんざり」が付きましました。福井新聞の購読を止め、他の新聞に切り替えることにしたのです。

もんじゅで何かを始めようとすると必ず、事故やトラブルが発生します。「またか」という憤りも報道されますが、「原子力機構は憑(つ)いていない」という同情心も見られます。とんでもない！ 原子力機構の技術開発体制がお粗末で、もんじゅにはトラブルの原因がいっぱい隠されているから、何かをする度に事故やトラブルとなって表面化するのです。さらに、税金で飯を食い、何をしでかしても実質的責任を課されない組織の墮落は、想像を超えるものがあります。

炉内中継装置の落下問題については、設計ミスも指摘されました。しかし、本質はそんなに単純な問題ではありません。「ナトリウムを冷却材に使う困難さ」の限界を、事故やトラブルで警告しているのだと言えるでしょう。もんじゅには多くの技術的課題が山積しています。いま我々の警告を大きく鳴らさないと、その被害は我々に降りかかることになるでしょう。もんじゅには、物理的危険性の上に、組織的危険性も内在しているのです。

2010年10月9日記

## 新聞折込基金の呼びかけ

美浜1号は、今年11月28日に営業運転開始から40年を迎えます。関西電力は「あと10年未満」の運転継続を発表し、あろうことか、「美浜原発4号」の増設まで言い出しています。また、日本原子力研究開発機構は、もんじゅの運転を再開しようとした矢先に再び事故を起こしています。私たちに「質問があるなら文書で出せ」と言いながら、公開質問状を出すと、回答を拒否し続けています。これらの横暴を美浜町民に広く伝え、「美浜原発廃炉・増設反対」「もんじゅ廃炉」を呼びかけたいと思います。10月26日「原子力の日」の原発推進宣伝に対抗して美浜町内への新聞折込みを行いたいと思います。

皆さんのカンパをお願いします。5万円が目標ですが、一口500円で何口でも結構ですので、私たちの新聞折込行動を支えて下さい。

振替口座 若狭ネット 00940-2-100687 (ご連絡は、久保まで 072-939-5660)